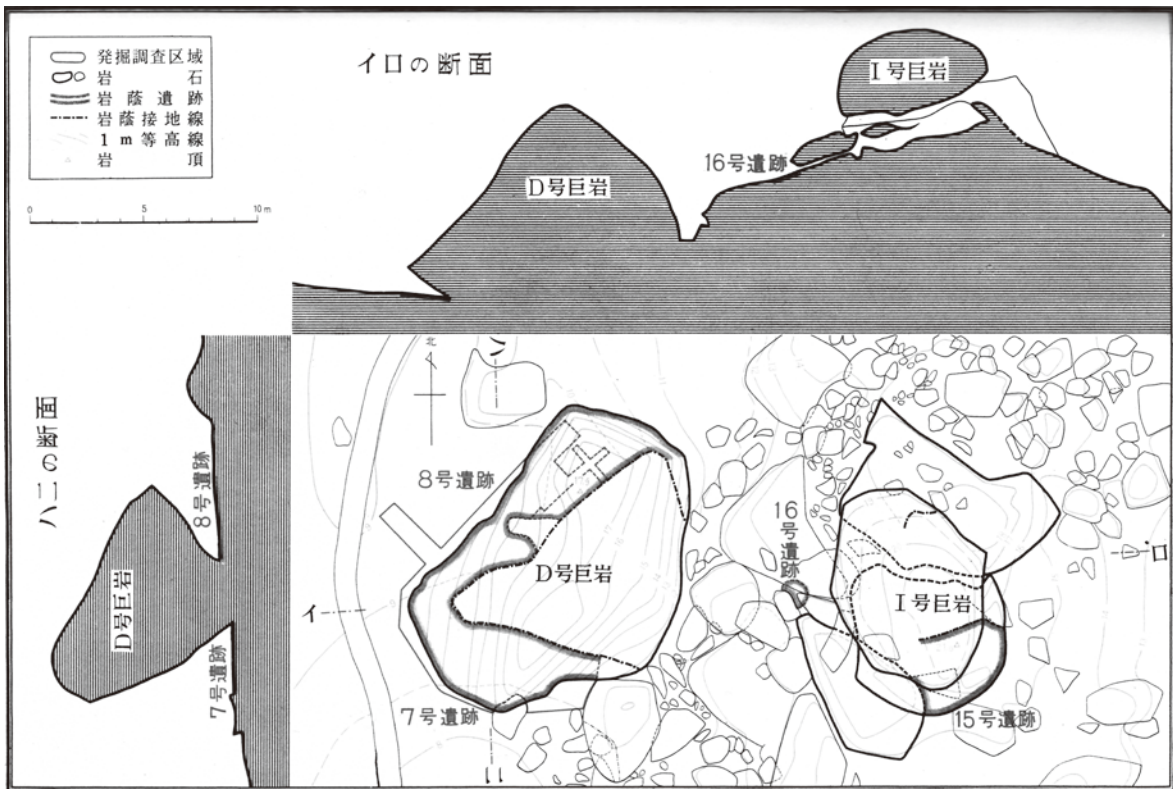


図出典 岡寺未幾2021「沖ノ島21号遺跡についての再検討(予察) — 記録写真の分析から —」
『沖ノ島研究』7 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会 (一部改変)

図2 沖ノ島祭祀遺跡の分布図



図出典 宗像神社復興期成会1958『沖ノ島』

図3 D号巨岩付近の地形図

一 刀 劍

沖ノ島祭祀遺跡では、刀劍にかかわる資料が多く出土している。このうち、八号遺跡を中心に出土した雛形鉄刀・刀子については小嶋篤による検討があるものの「小嶋二〇二一a」、真正の刀劍にかかわる専論はみない。

たしかに、沖ノ島祭祀遺跡出土刀劍のうちには全体の形をとどめるものがないために、鉄製刀劍身の分析には限界がある。だが、いくつかの装具を観察することにより、本来は装飾性ゆたかな刀劍が少なからず奉獻されていたことがわかる。以下、七号遺跡ほか、古墳時代後期の祭祀遺跡ごとにみられる特徴的な刀劍を通覧する。

七号遺跡（図四） 振り環二点と水晶製三輪玉一七点が出土しており、護拳帯に三輪玉をつけた振り環頭大刀二振を構成していたとみられる。これらにともなう刀身本体は詳らかでないが、つぎに述べるように、鉄地銀張の鍔ないしは鞘口金具をつけた鉄刀がその候補となる。

振り環頭大刀は古墳時代後期前半に成立した倭装の装飾大刀であり、継体大王の地方進出や屯倉の設置などと連動しながら各地に普及したと考えられている「高松二〇〇七、齊藤二〇一八」。振り環と水晶製三輪玉が出土した事例として、埼玉県埼玉將軍山古墳、大阪府河内愛宕塚古墳、奈良県市尾宮塚古墳、大分県朝日天神山一号墳などがある。

このうち河内愛宕塚古墳の振り環頭大刀は鉄地銀象嵌の鞘口金具や鞘尻金具をとまう。構造は異なるが、鉄地に銀を組みあわせた装具である点において沖ノ島七号遺跡の鉄地銀張鍔（鞘口金具？）とつうずる。

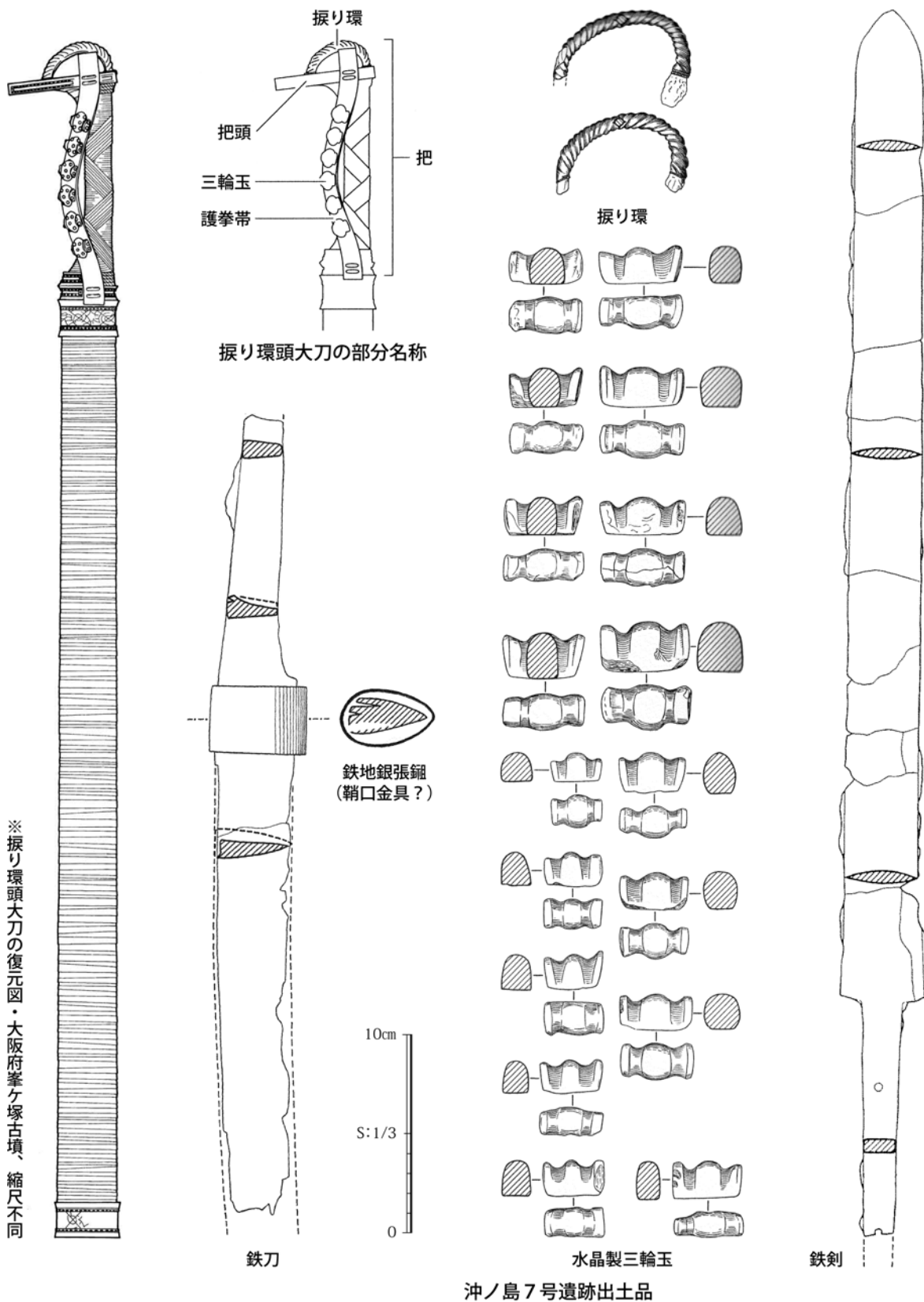
七号遺跡では全長六・一cm以上の鉄劍も出土している。六世紀においても少なくない数の鉄劍が古墳に副葬されているが「大谷二〇一六」、それでもなお、後期的な刀劍様式の主とはいえない。弥生時代から古墳時代中期にいたる伝統的な武器である劍が古墳時代後期の祭祀空間に存在した事実も、七号遺跡の性格を評価するうえで留意すべきだろう。

八号遺跡 把頭の形式を直接示す資料はないが、間接的にうかがえる刀装具はいくつかある。

第一に挙げるのは、連珠円文を打ち出した銅地金張の責金具三点である（図五―一―三）。縁が傾斜したものの類例として、群馬県綿貫観音山古墳から出土した頭椎大刀の把の両端につけた責金具がある。傾斜のないものも、同じ大刀の筒金具にともなうものだろう。これを頭椎大刀Aとする。

第二に、車輪石のように周囲に肋条によって匙面をつくりだした卵形の環状金具に注目する（図五―四・五）。これも、福島県渕の上一号墳で出土した頭椎大刀の把と把頭の境にある金具につうじ、沖ノ島八号遺跡にも一振の頭椎大刀が存在した可能性を示す。これを頭椎大刀Bとする。

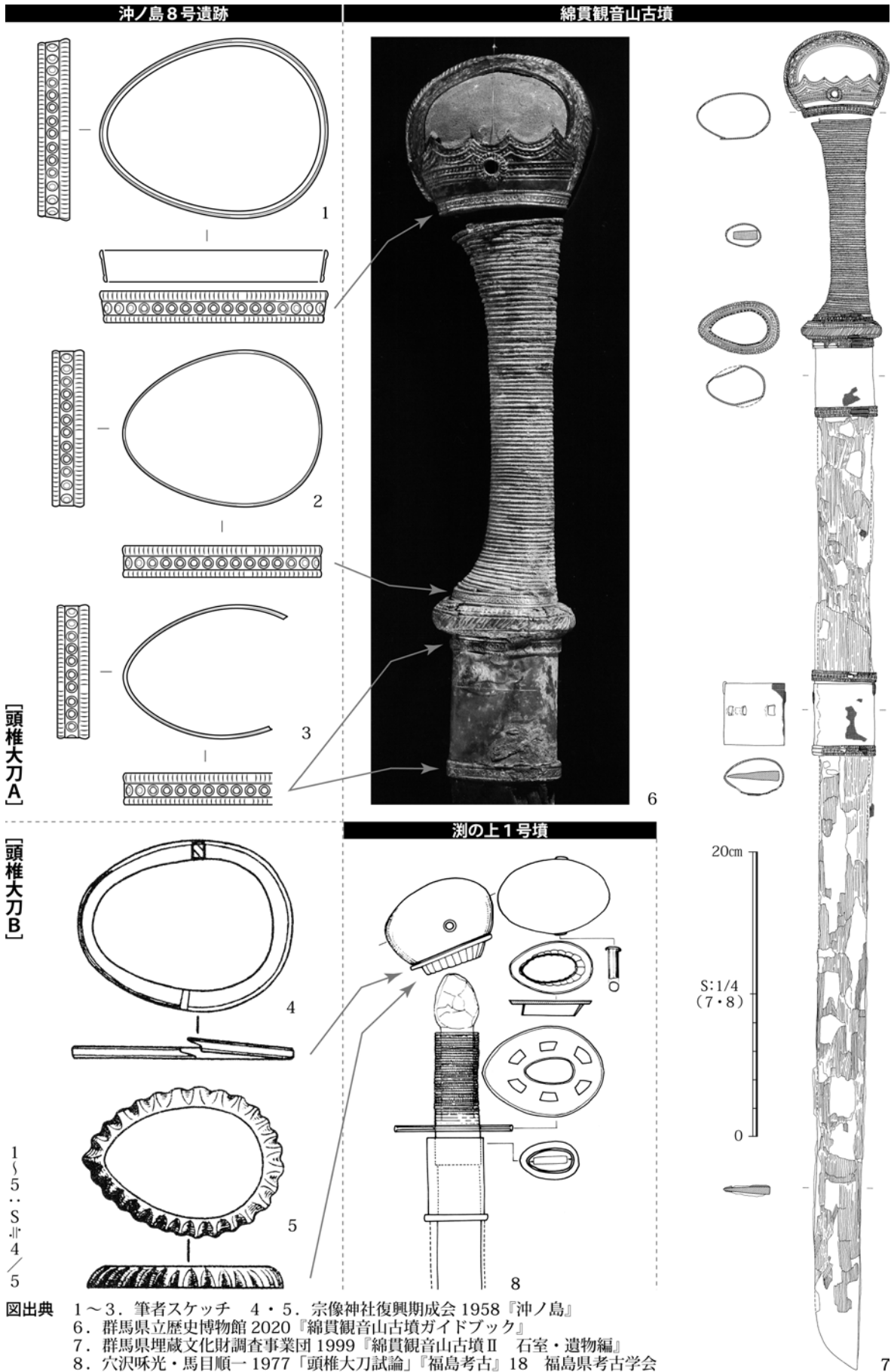
頭椎大刀は古墳時代後期前半の木製品からはじまり、後期後半の折衷系大刀段階に金属装化、後期末に金銅装化する。八号遺跡の頭椎大刀Aは折衷系大刀段階、頭椎大刀Bは金銅装化段階の初期の事例にあたる。折衷系頭椎大刀は、倭系の系譜をひく頭椎大刀に外来系譜の刀装具を装着したものである「橋本二〇〇六」。古代の宗像では、福津市宮地嶽古墳、福津市勝浦水押SO―一、古賀市楠浦中里A一号墳で金銅装頭椎大刀が出土しており、集中分布域をなす「小嶋二〇二一b、齊藤二〇一九」。八号遺跡



沖ノ島7号遺跡出土品

図出典 峯ヶ塚古墳 [羽曳野市教育委員会 2002 『史跡古市古墳群 峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』]
 沖ノ島7号遺跡 [宗像神社復興期成会 1958 『沖ノ島』]
 振り環頭大刀の部分名称 [出光美術館 2014 『宗像大社国宝展 一 神の島・沖ノ島と大社の神宝 一』 (一部改変)]

図4 沖ノ島7号遺跡出土の振り環頭大刀と鉄剣



図出典 1～3. 筆者スケッチ 4・5. 宗像神社復興期成会 1958『沖ノ島』
 6. 群馬県立歴史博物館 2020『綿貫観音山古墳ガイドブック』
 7. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999『綿貫観音山古墳Ⅱ 石室・遺物編』
 8. 穴沢味光・馬目順一 1977「頭椎大刀試論」『福島考古』18 福島県考古学会

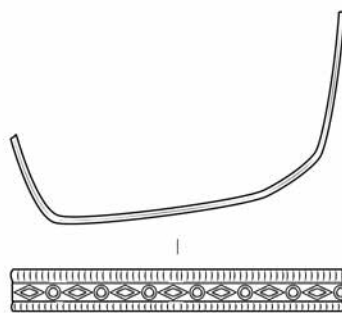
図5 沖ノ島8号遺跡出土の刀装具とその類例 (1)

の頭椎大刀A・Bはこれらよりも古く、宗像で頭椎大刀が展開する嚆矢とみられる。離島の祭祀空間における頭椎大刀二振の共存事例として、三重県伊勢神島の祭祀遺物がある。

第三に、円文と菱形文を交互に打ちこんだ銅地金張の責金具を挙げる(図六・左)。このような責金具は、大阪府一須賀WA1号墳(図六・右)や岡山県岩田一四号墳で出土した単龍環頭大刀のように、大加耶系の技術を使った環頭大刀にもちいることが多い[金二〇一七]。八号遺跡出土品が舶載品か渡来系工人による作品かは判断しかねるものの、頭椎大刀Aの系譜とあわせて考えることにより、外来系装飾大刀の情報を入手しうるような国際性に長けた佩用者像がみえてくる。

なお、頭椎大刀A・Bの類例出土古墳として示した綿貫観音山古墳と湖の上1号墳では朝鮮半島系の突起付冑が出土していることも[内山一九九二]、間接的ながら八号遺跡の性格を考えるうえで留意しておく。

二三号遺跡 D号巨岩の東に隣接する二三号遺跡では、環頭大刀の金銅製装具が出土した(図七・三)。把あるいは鞘の筒、鞘尻金具は横断面が八角形である。鞘の中心飾りは心葉形透かしを等間隔に穿つ。これらの装具を備えた事例として、単鳳環頭大刀(群馬県平井地区1号墳・小泉大塚越三号墳、栃木県益子天王塚古墳、島根県鷺の湯病院跡横穴墓)、三葉環頭大刀(島根県岡田山1号墳)がある。舶倭の区別は決しがたいが、倭の国家祭祀の場においても外来系の環頭大刀が奉献されたことがわかる。



S ≒ 4/5



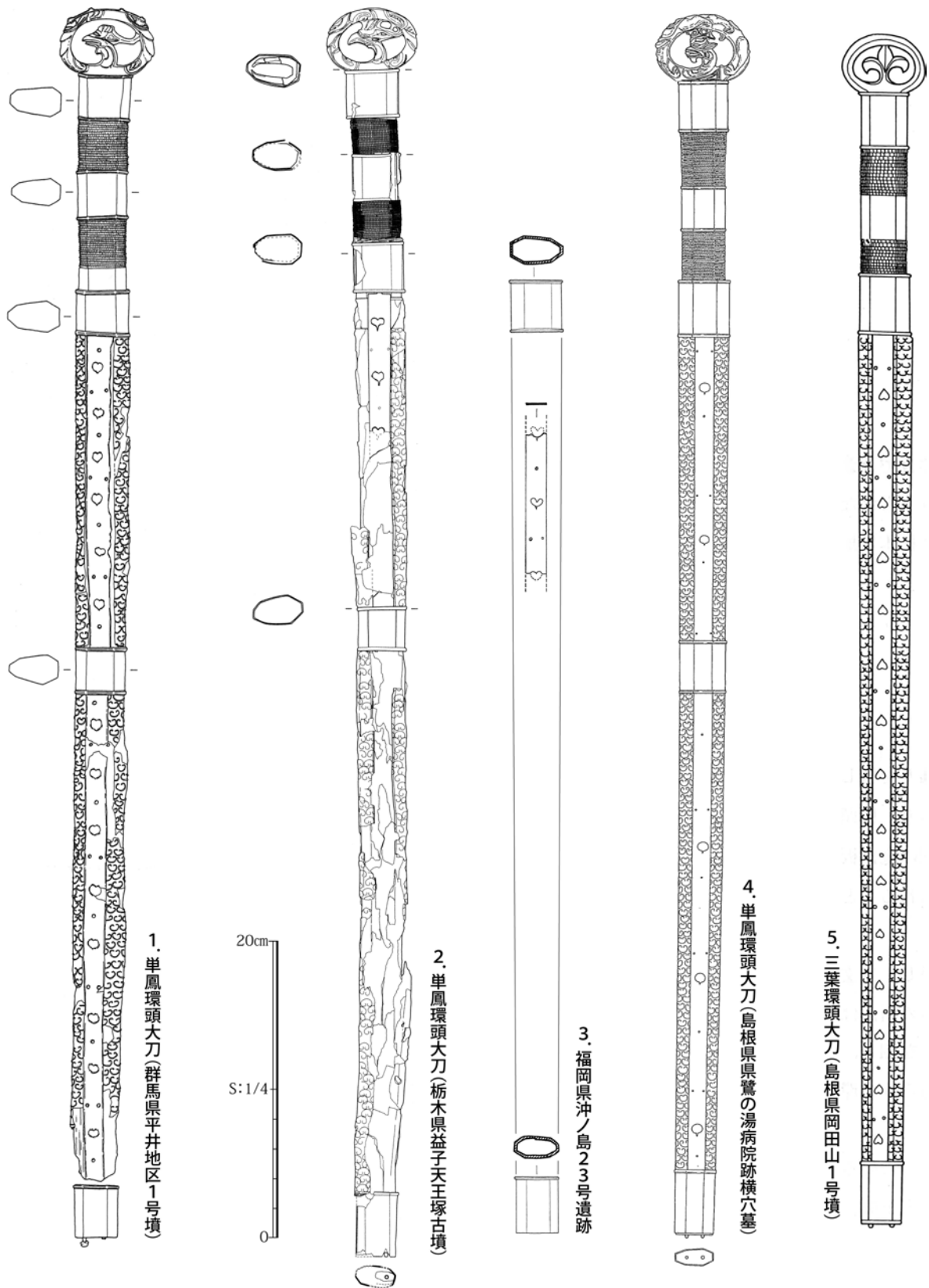
図出典

左：福岡県沖ノ島8号遺跡 [筆者スケッチ]

右：大阪府一須賀WA1号墳

[大阪府立近つ飛鳥博物館 1996 『金の大刀と銀の大刀』]

図6 沖ノ島8号遺跡出土の刀装具とその類例 (2)



1. 単鳳環頭大刀(群馬県平井地区1号墳)

2. 単鳳環頭大刀(栃木県益子天王塚古墳)

3. 福岡県沖ノ島23号遺跡

4. 単鳳環頭大刀(島根県鷲の湯病院跡横穴墓)

5. 三葉環頭大刀(島根県岡田山1号墳)

- 図出典
1. 藤岡市教育委員会 1993 『平井地区1号古墳』
 2. 持田大輔・中條英樹 2009 「益子天王塚古墳出土遺物の調査(2) — 環頭大刀・馬具 —」 『早稲田大学津八二記念博物館 研究紀要』 10
 3. 第三次沖ノ島学術調査隊 1979 『宗像 沖ノ島』 宗像大社復興期成会
 4. 大谷晃二・松尾充晶 2004 「島根県裝飾付大刀と馬具出土古墳・横穴墓一覧(改訂版)」 『島根考古学会誌』 20・21 島根考古学会
 5. 町田 章 1987 「岡田山1号墳の儀杖大刀についての検討」 『出雲岡田山古墳』 島根県教育委員会

図7 沖ノ島23号遺跡出土の刀装具とその類例

二 鉄 鉾

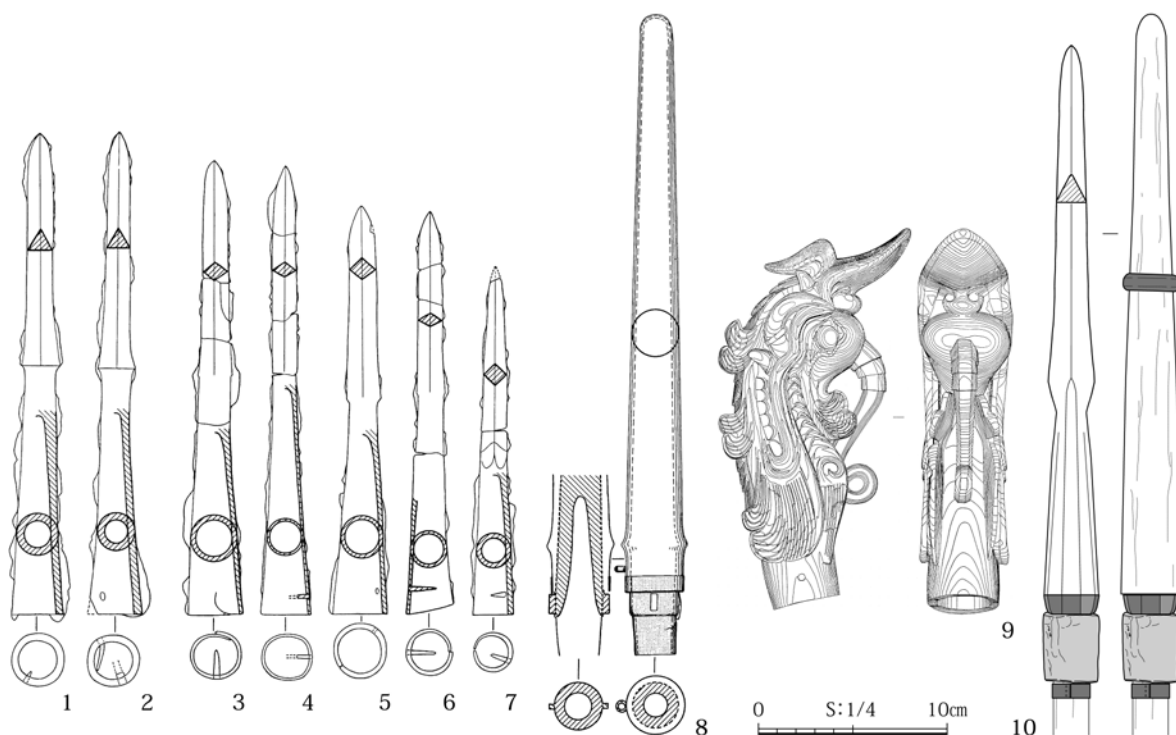
鉾にかかわる資料は七・八・一六・一九・二二号遺跡で出土している。ここでは全形がうかがえる七・八号遺跡出土品を検討する。

七号遺跡 身部の断面が三角形の三角穂式鉄鉾と、断面菱形の鎬式鉄鉾が出土した(図八一〜七)。三角穂式鉄鉾は古墳時代後期前半に出現した武器である。高田貫太は古墳時代鉄鉾の系譜を論じるなかで、東アジア諸王権との関係に目配りしながら三角穂式鉄鉾の多くを倭製品として評価する[高田一九九八]。高田が示した三角穂式鉄鉾にかかわる見解は多岐にわたるが、後期古墳の主要な副葬品目とみる認識は揺らぎそうにない。

筆者も高田の研究を批判的に発展させるかたちで三角穂式鉄鉾の編年や分布の背景を検討してきた[齊藤二〇二〇・二〇二二b]。これにもとづけば、七号遺跡の三角穂式鉄鉾はいずれも全長二五cm程度で、筆者による編年の第三段階(TK四三〜TK二〇九型式期)、おおむね六世紀後半から七世紀初頭に位置づけられる。鐔や銀装具などの装飾はみられない。

日本列島の三角穂式鉄鉾は、河川や港湾をのぞむ臨海性のたかい立地の遺跡からの出土が目立ち、海上交通や対外交渉にかかわる保有者像を描くことができる。沖ノ島は、おなじく三角穂式鉄鉾が出土した長崎県双六古墳(壱岐島)や島根県立石古墳(隠岐の島)とともに東アジアとの境界線上にたたずむことも、このような図式の典型としてとらえたい。ちなみに、出土した遺跡の規模の比較から、鎬式鉄鉾は三角穂式鉄鉾に從属する階層の武器と理解している[齊藤二〇二〇]。

三角穂式鉄鉾 鎬式鉄鉾 銀装金銅鉾鞘 金銅製龍頭(旗竿) 鞘入銀装鉄鉾



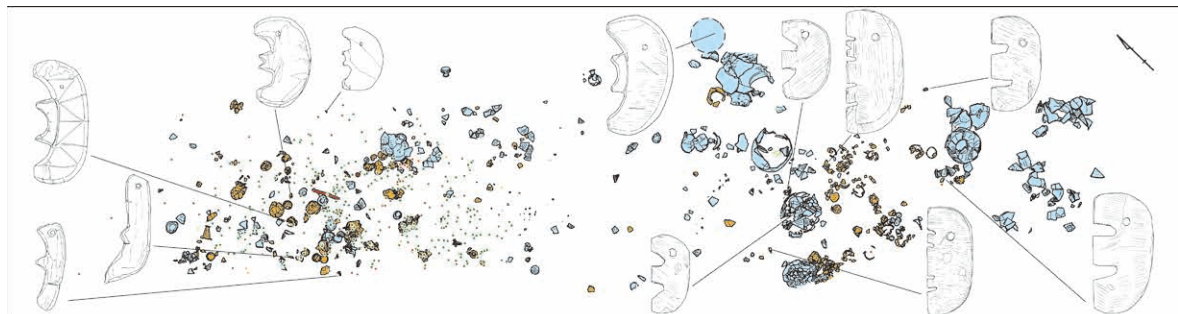
図出典 1~7. 沖ノ島7号遺跡 8. 沖ノ島8号遺跡 [以上、宗像神社復興期成会 1958 『沖ノ島』]
9. 沖ノ島5号遺跡 [第三次沖ノ島学術調査隊 1979 『宗像 沖ノ島』]
10. 千葉県金鈴塚古墳 [齊藤大輔 2018 『金鈴塚古墳と銀の鉾』 『金鈴塚古墳研究』 木更津市郷土博物館金のすず]

図8 沖ノ島7・8号遺跡出土の鉄鉾と関連資料

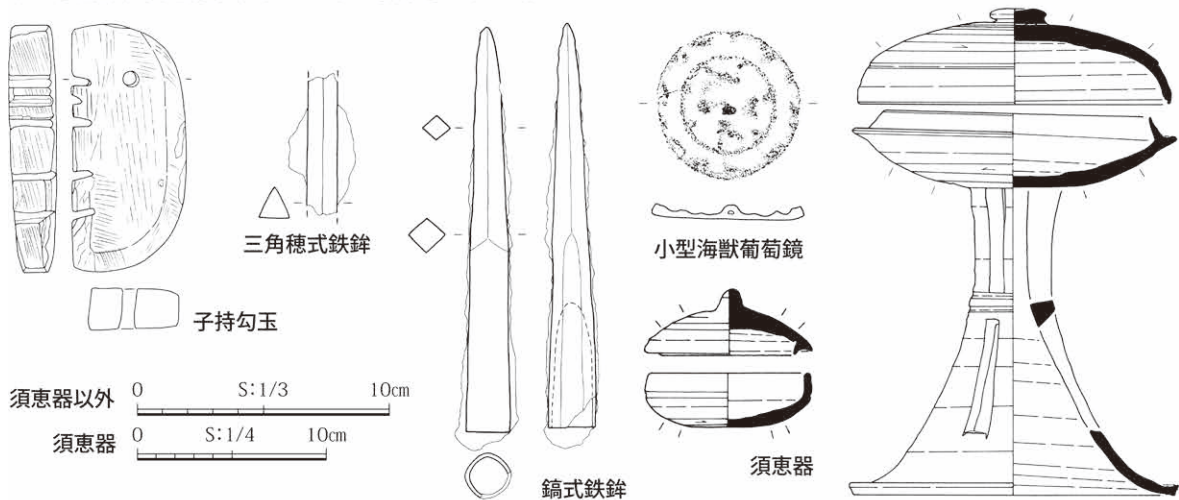
祭祀遺跡における三角穂式鉄鉾の出土事例として、六世紀後半から七世紀にかかる埼玉県北大竹遺跡の「第一号遺物集中」がある〔図九〕。大量の滑石製子持勾玉、長脚高杯や胴部最大幅80cm以上の大甕をふくむ須恵器群、小型の海獣葡萄鏡、ミニチュア鉄器などと一緒に出土しており、三角穂式鉄鉾はかならずしも戦闘本位の武器ではないことを示す。

八号遺跡 金銅製の鞘に納めた状態でさびついた鉄鉾が一本出土した（図八一八）。鉄鉾本体の袋端部には銀装具をつける。銀装の鉄鉾は数あれど、金銅製の鞘をともなう類例はみいだせない。金銅製の龍頭や高機、五弦琴とともに、沖ノ島祭祀を特徴づける儀器性のたかい器物といえる。ただし、鉄鉾や石突の表面に木質のこる事例として、群馬県若田大塚古墳、千葉県金鈴塚古墳（図八一〇）、福島県中田装飾横穴出土品などが知られる。鉾の携行や保管、副葬にさいして木鞘に納めること自体は一般的だったのかもしれない。

また、金銅製鞘の袋端部には紐をとおしたとおぼしき単環がある。似た単環をともなう鉾の装具として、TK二一七型式期（七世紀前半）の岡山県定東塚古墳出土金銅製品がある。定東塚古墳の鉾は古墳から出土した三角穂式鉄鉾のうち最新段階のもので、類例のとおぼしい銀装の鐔をともなう〔齊藤二〇二三b〕。八号遺跡の銀装金銅鉾についても古墳時代的な鉄鉾様式の極地ととらえるが、この資料をめぐっては五号遺跡で出土した金銅製龍頭（図八一九）の「石突」とみる意見もあるように〔弓場一九八五〕、その内部構造は不明である。X線CTによる構造解析が俟たれる。



第1号遺物集中(遺物集中(S:1/120) 子持勾玉(S:1/6))



図出典 埼玉県・埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2022『北大竹遺跡』(第2分冊) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 477

図九 北大竹遺跡の「第1号遺物集中」とおもな出土品

三弓具

沖ノ島祭祀遺跡で出土した弓具にかかわる資料として、鉄鏃と胡籙金具が知られる。鉄鏃は全体の一部しか報告されていないことや、報告書刊行当時は胡籙金具へたいする認識の萌芽期であったことから以下の叙述も十全とはいかないものの、向後の議論に備えた記述を試みたい。

鉄鏃 七号遺跡では、先端で数えて二三五本の鉄鏃が出土したという。完形品はないために全長規格はわからないが、報告書で図示されたものはすべて長頸鏃とみられる(図一〇)。先端の形には、片刃、両刃(長短の二種あり)、三翼のものがあるようだが、三翼のものについては鉄鏃であることが確かめられない。以下、片刃と両刃について検討する。

片刃、両刃ともになぞかな刃関をもち、完全にはナデ関化していない。頸部と茎部の関はほとんどが棘関である。棘関の出現はMT一五型式期までさかのぼりうるが「杉山二〇二三」、広域普及はTK四三型式期以降である「水野一九九三」。七号遺跡の鏃はTK四三型式期に接点をもつ。

鉄鏃(矢)は刀剣やヤリ、鉾と異なり、消耗品としての特性が色濃い。そのため、一つの遺構から出土した鉄鏃の本数が本来の矢束の実態を示すとはかぎらない。しかしそれでもなお、七号遺跡の二三〇本以上という数は各地の有力な後期古墳とくらべても遜色がない。奈良県藤ノ木古墳の約八〇〇本や群馬県綿貫観音山古墳の約五〇〇本、奈良県牧野古墳の約四〇〇本にはおよばないものの、たとえば房総半島を代表する前方後円墳である千葉県金鈴塚古墳の約二〇〇本以上に近似し、屈指の出土数といえる。

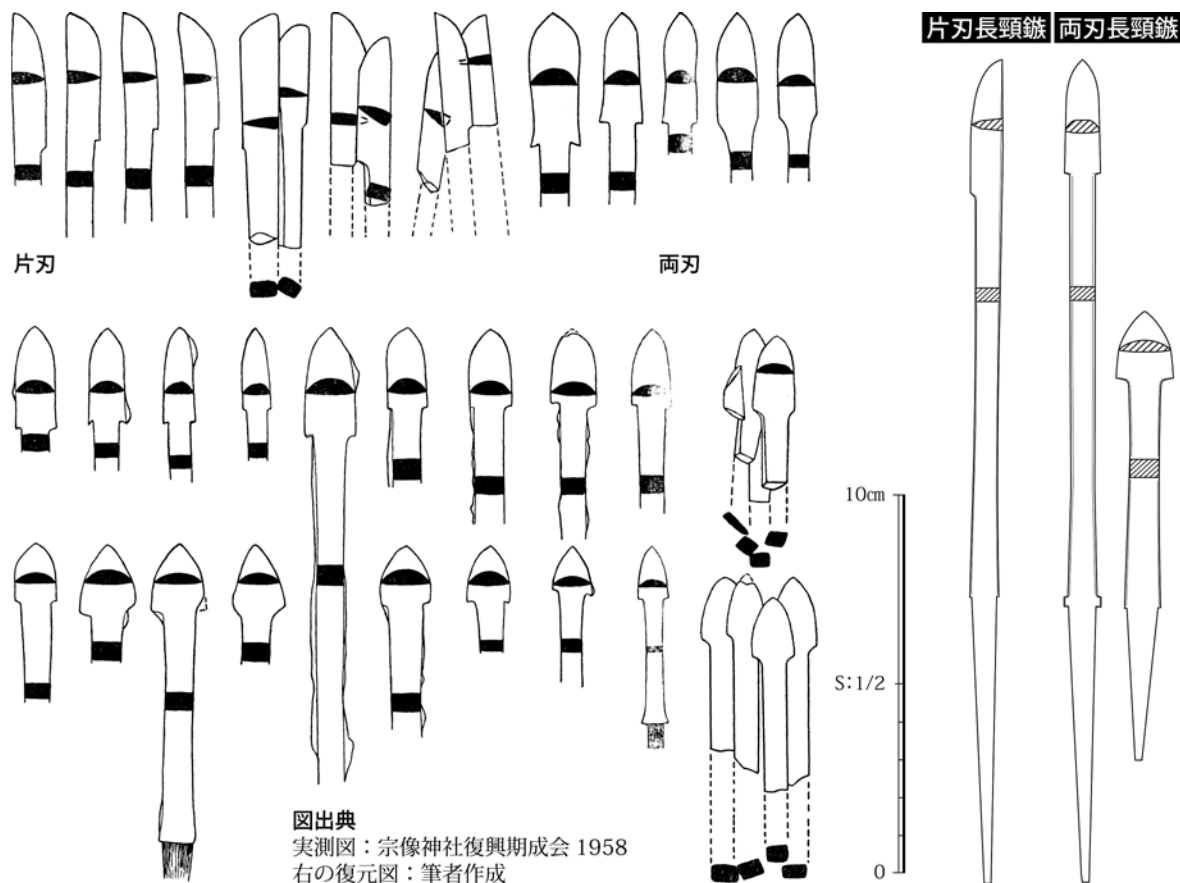


図10 沖ノ島7号遺跡出土の鉄鏃と復元図

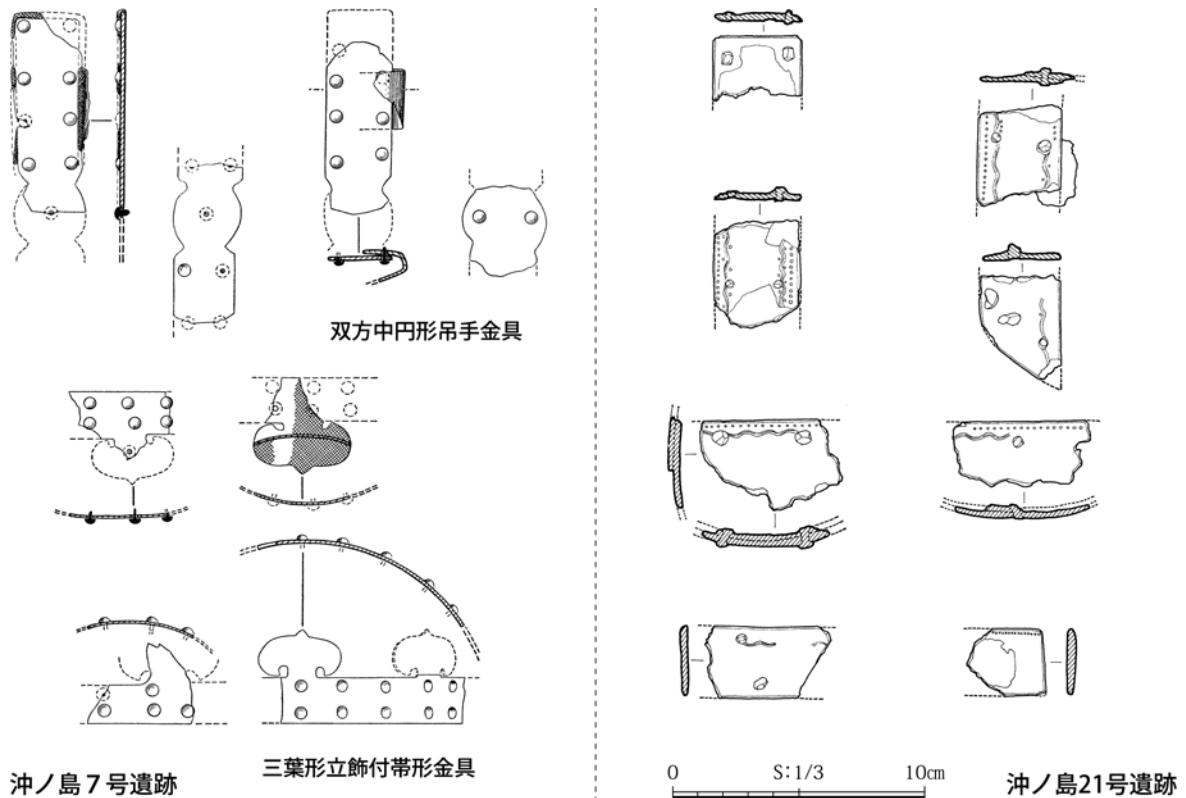
一単位を三〇本と仮定すれば七〜八組、四〇本と仮定すれば五〜六組以上の矢束が七号遺跡に奉獻されたことになる。なお、束の状態で銹着した鉄鏃は同一の形式でまとまっている。

片刃と両刃の組みあわせは古墳時代後期における高位の鏃組成としてとらえられるが、沖ノ島祭祀遺跡においては在地の集団を表象する平根鏃がとほしいこともまた、奉斎者の性格を反映するものだろう。

胡籜 七号遺跡の出土品に「靱（或は胡籜）金具」と項目立てされた銹留の鉄製品があるが、双方中円形吊手金具や三葉形立飾付帯形金具をともなうことから、鏃を下向きにして矢束を収納・携行する胡籜の金具とみてもよい。さらに、一個体の胡籜に二個もちいる双方中円形吊手金具が四個あることから、本来は二個体以上の胡籜があったことがわかる（図一・左）。

三葉形立飾付帯形金具は鉄製で彫金装飾がなく、鏃が対になって二個ずつ打たれる点に特徴があり、土屋隆史による分類の「双方中円形Ⅲ群」にあたる。土屋の編年では、倭における胡籜金具の第Ⅲ段階（MT一五〜TK四三型式期）、すなわち、近畿地方を分布の核としながら倭製品が日本列島広域に分布する段階に位置づけられている「土屋二〇一八」。吊手金具の中円部に二鏃を配置する類例は、鉄鏃の型式からTK四三〜TK二〇九型式期頃に位置づけられる静岡県平沢一号墳例がある「滝沢二〇〇〇」。

二一号遺跡の「衝角付冑」と項目立てされた金銅製品も実際は胡籜の金具だろう。表面の縁に銹留の痕跡や列点文、波状文がある（図一・右）。



図出典 沖ノ島7号遺跡 [宗像神社復興期成会 1958『沖ノ島』]
沖ノ島21号遺跡 [第三次沖ノ島学術調査隊 1979『宗像 沖ノ島』]

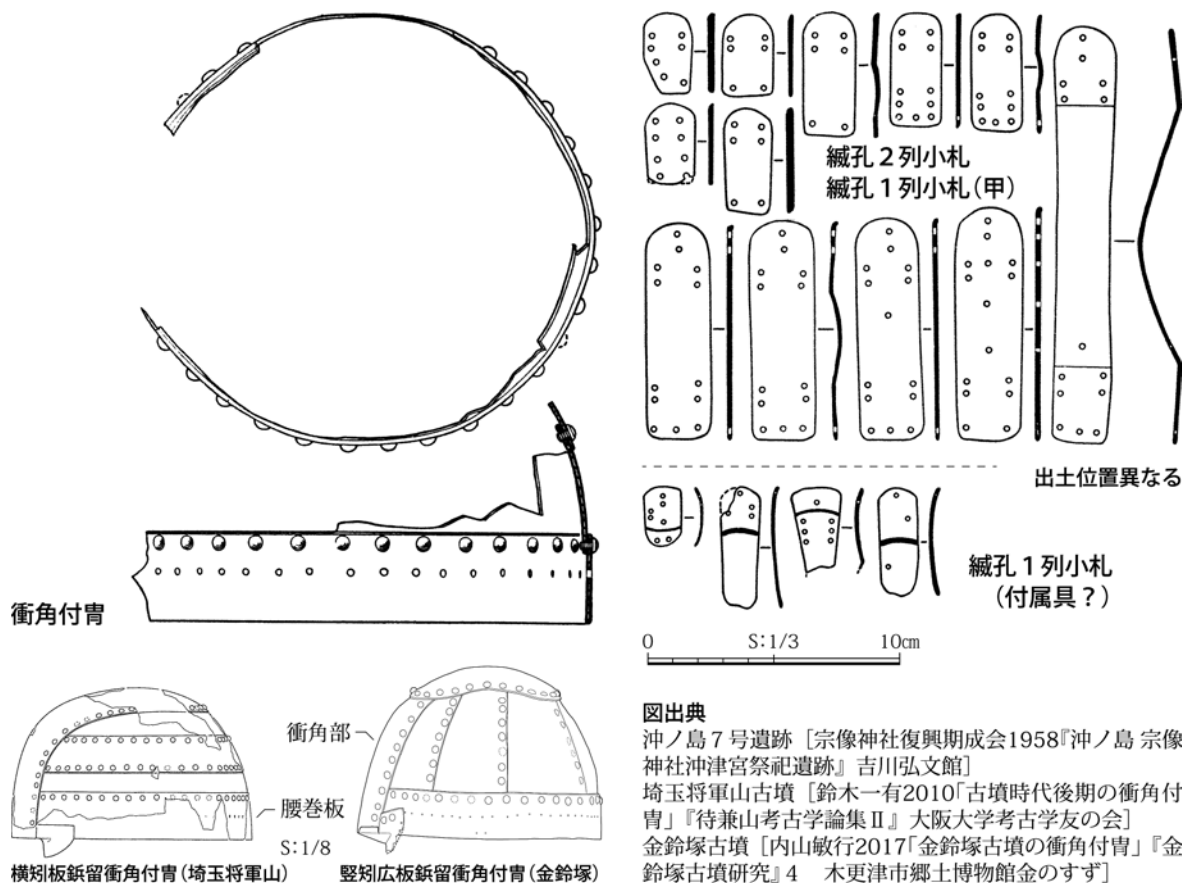
図 11 沖ノ島7・21号遺跡出土の胡籜金具

四 甲 冑

沖ノ島七号遺跡では、衝角付冑の腰巻板と小札が出土している(図一二)。七号遺跡の小札には緘孔一列と二列の二種があり冑とのセット関係は判然としませんが、内山敏行は「衝角付冑と二列小札甲の組み合わせが倭の甲冑様式の典型」とみる〔内山二〇一九・一八一頁〕。

古墳時代後期の衝角付冑には、横矧板鉾留式と豎矧広板鉾留式の二種がある。小札甲+横矧板鉾留衝角付冑と振り環頭大刀が共伴した古墳として、愛媛県東宮山古墳、福岡県山の神古墳、大阪府寛弘寺七五号墳、千葉県法皇塚古墳、埼玉県埼玉將軍山古墳などがある。冑の有無にゆるやかな階層性を読みとれるとすれば、七号遺跡における武器祭祀の優位性をここにもみいだせる。むしろ、甲冑と振り環頭大刀がセットで運用されたとはかぎらないものの(例・山の神古墳など)、豎矧広板鉾留衝角付冑と振り環頭大刀の共伴事例はみいだしにくいこととあわせ、古墳時代後期の武装を類型化するうえで示唆に富む。

玄界灘沿岸の内地では、宗像市相原古墳、福岡市東区かけ塚山古墳で古墳時代後期の小札と冑が出土している。相原古墳は縦長板鉾留冑+緘孔一列小札(+胸当状鉄製品?)の朝鮮半島系甲冑、かけ塚山古墳は豎矧広板鉾留衝角付冑+緘孔二列小札の倭系甲冑とみられる〔齊藤二〇二三a〕。相原古墳、かけ塚山古墳ともに精緻なつくりの金銅装馬具が出土している点も、七号遺跡とつうずる。



図出典
 沖ノ島7号遺跡〔宗像神社復興期成会1958『沖ノ島 宗像神社沖津宮祭祀遺跡』吉川弘文館〕
 埼玉將軍山古墳〔鈴木一有2010「古墳時代後期の衝角付冑」『待兼山考古学論集Ⅱ』大阪大学考古学友の会〕
 金鈴塚古墳〔内山敏行2017「金鈴塚古墳の衝角付冑」『金鈴塚古墳研究』4 木更津市郷土博物館金のすず〕

図12 沖ノ島7号遺跡出土の甲冑と関連資料

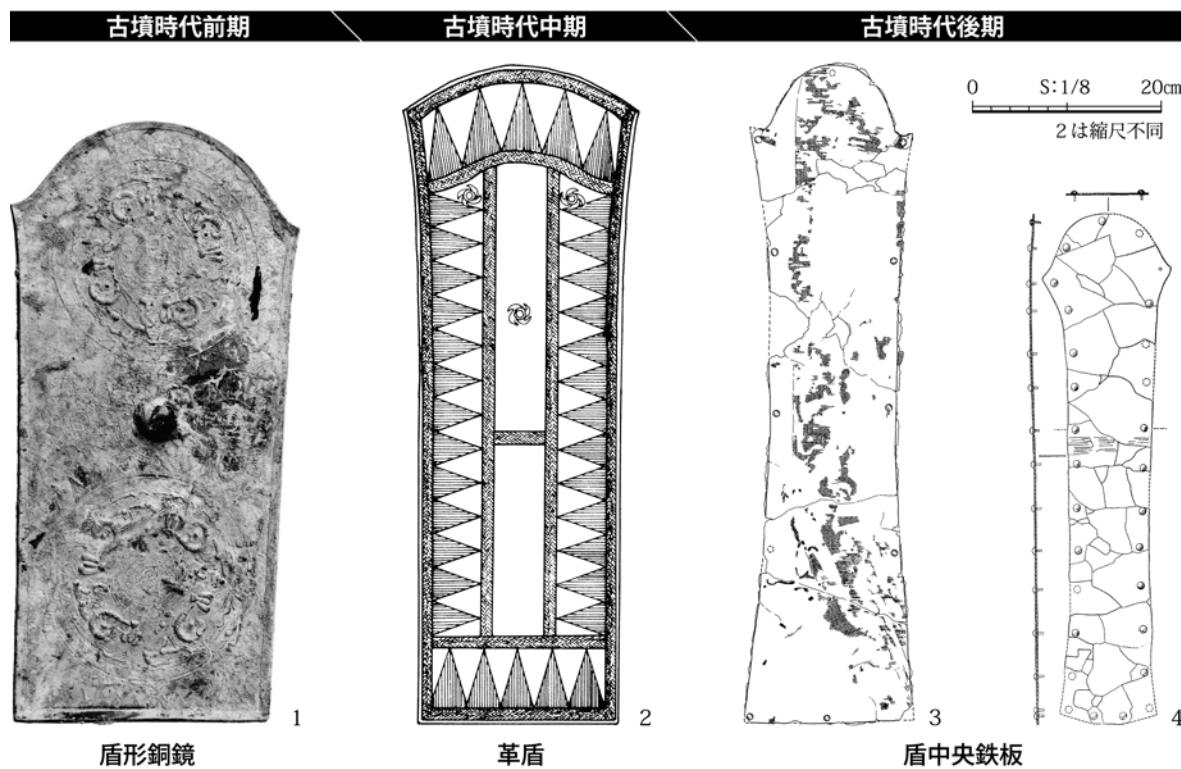
五 盾

沖ノ島七号遺跡では、上辺が山形をなす革盾の中央を飾っていたとみられる鉄板が一枚出土した(図一三一四)。類例として大阪府古市古墳群の峯ヶ塚古墳出土品が知られる(図一三一三)。表面を差し縫いの文様で装飾した漆塗りの革盾は古墳時代中期を象徴する武具であるが(図一三一二)、橋本達也は、革盾は中央の文様によってその存在を表徴していたと論じつつ、盾の中央が鉄板化された重要性を説く「橋本一九九九」。

盾中央鉄板をふくめた盾全体の象徴性や系譜、祭祀空間における配置の意味については仁木聡による総論があり、盾の生産と管理、副葬・祭祀様式の創出と配布にも倭王権が主体的にかかわっていたという考察が、現状における盾研究の到達点を示している「仁木二〇〇七」。

その後、古墳時代の盾にかかわる知見はほとんど得られていなかったが、二〇二二年一二月、奈良県富雄丸山古墳の造り出し部において盾形銅鏡が出土したことにより、盾の系譜論がみなおされつつある。盾形銅鏡の背面中央には鈕があり、その上下に倭鏡に認められる甕龍文を配する。表面は磨かれており、倭鏡工人が製作したとみられるが、平面形態は上辺山形の盾そのものである「図一三一、奈良市教育委員会二〇二三」。

盾形銅鏡の系譜については橋本が検討しているが「橋本二〇二三」、前期に創出された器財の外形が後期まで引き継がれた背景には、王権の正統性を示す財体系を維持する仕組みがあったのではないかと予察しておく。



図出典 1. 奈良県富雄丸山古墳 [奈良市教育委員会 2023 『富雄丸山古墳の発掘調査—第6次調査—』]
2. 大阪府和泉黄金塚古墳 [橋本達也 1999 「盾の系譜」 『国家形成期の考古学』 大阪大学考古学研究室]
3. 大阪府峯ヶ塚古墳 [羽曳野市教育委員会 2002 『史跡古市古墳群 峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』]
4. 福岡県沖ノ島7号遺跡 [宗像神社復興期成会 1958 『沖ノ島』]

図13 沖ノ島7号遺跡出土の盾中央鉄板と関連資料

六 馬 具

複雑多岐にわたる沖ノ島祭祀遺跡出土の馬具については、諫早直人による系譜の整理と桃崎祐輔による馬装復元論がある〔諫早二〇一二、桃崎二〇二二〕。とくに桃崎によって最低でも国産三組（A～Cセット）、舶載五組（D～Hセット）に分離されたことは、馬具をふくめた武装全体の復元研究にも示唆を与える。古墳時代後期の武装具はセット関係の復元がむずかしいが、類似した遺物組成から共通する項目を抽出する作業をかさねるほかない。

沖ノ島祭祀遺跡の武装具でこの作業を実践するならば、七号遺跡の振り環頭大刀二振がヒントとなる。振り環頭大刀は倭王権が創出した大型の大刀であり、その消長は古墳時代後期の時代幅さえも規定しうる〔齊藤二〇二二〕。分布の核は奈良盆地にもちながら、九州北部や関東といった古墳時代社会における列島の東西端にも集中する。桃崎が分離した七号遺跡出土馬具セットのうち、水晶製三輪玉付振り環頭大刀と組みあう可能性がたかいセットと、その根拠となる類例出土古墳はつぎのとおり。

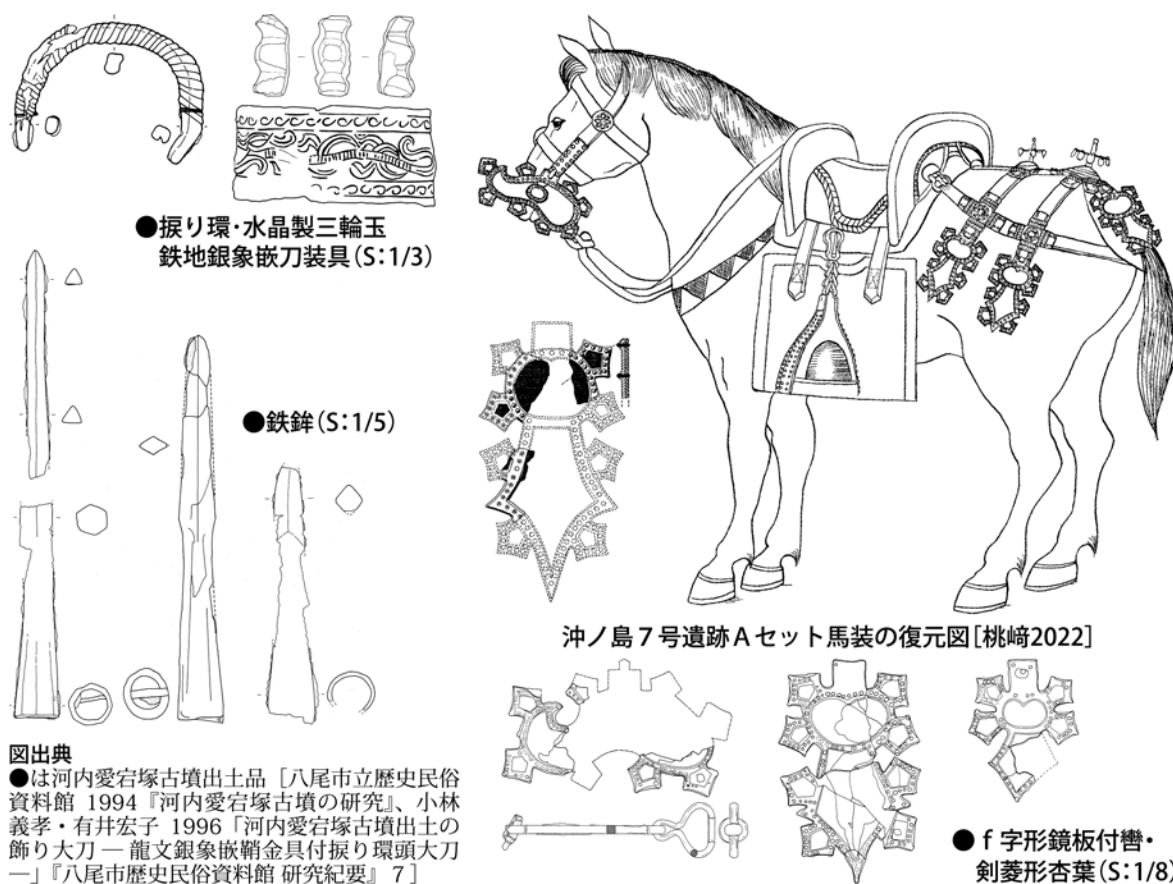
Aセット（子持剣菱付f字形鏡板付轡・子持剣菱付剣菱形杏葉）

大阪府河内愛宕塚古墳、福岡県桂川王塚古墳

Bセット（十字文楯円形鏡板付轡・楯円形三葉文杏葉）

滋賀県鴨稻荷山古墳、滋賀県山津照神社古墳、京都府物集女車塚古墳

大阪府寛弘寺七五号墳、三重県井田川茶白山古墳



沖ノ島7号遺跡Aセット馬装の復元図〔桃崎2022〕

図出典

●は河内愛宕塚古墳出土品〔八尾市立歴史民俗資料館 1994『河内愛宕塚古墳の研究』、小林義孝・有井宏子 1996『河内愛宕塚古墳出土の飾り大刀―龍文銀象嵌鞍金具付振り環頭大刀―』〔八尾市歴史民俗資料館 研究紀要』7〕

● f字形鏡板付轡・
剣菱形杏葉 (S:1/8)

図 14 沖ノ島7号遺跡のAセット馬装と河内愛宕塚古墳の武装

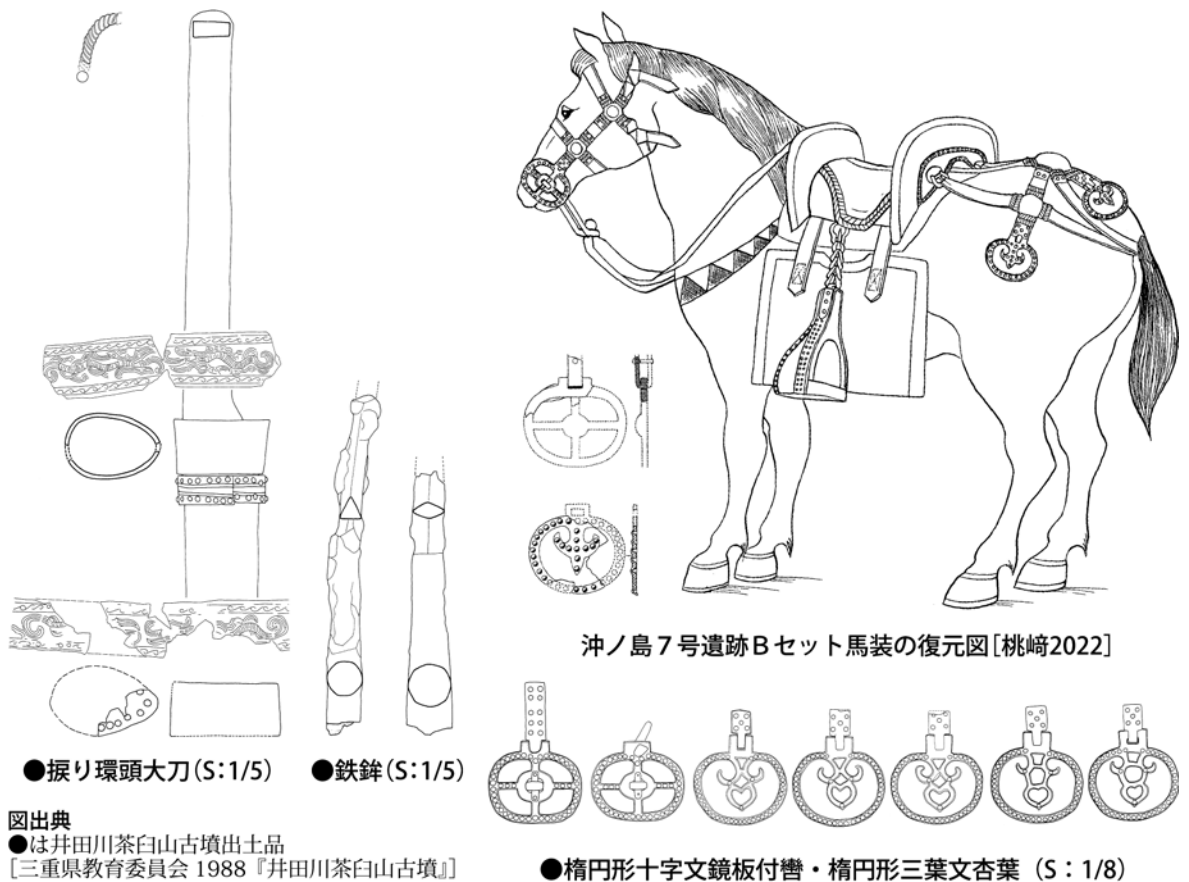
※参考資料①…福岡県岩戸山古墳の石馬と振り環頭大刀形石製表飾
 「齊藤二〇一八、神ほか二〇一八」

参考資料②…大阪府の北摂にあたる梶原D一号墳でもBセットの類例が出土しているが、北摂は奈良盆地とならんで振り環頭大刀の分布の核をなす

このうち河内愛宕塚古墳では水晶製三輪玉も出土しており、沖ノ島七号遺跡と似た武装をなす。Bセットの楕円形三葉文杏葉は振り環頭大刀や広帯二山式冠とともに継体朝の画期を示す器財である「高松二〇〇七」。いずれも倭の身分表示機能を志向した武装といえる(図一四・一五)。

たほう、舶載・棘葉形杏葉と国産・振り環頭大刀の共伴も、埼玉県埼玉將軍山古墳、奈良県藤ノ木古墳、熊本県打越稲荷山古墳、大分県朝日天神山一号墳などでみられるが、これらは当初からセットで運用されたのではなく、外交にあたった有力首長が独自に入手した馬具も含みうる。

たしかに、埼玉將軍山古墳で水晶製三輪玉付振り環頭大刀と、馬具二セット(A(新羅系…心葉形十字文鏡板付轡・棘葉形杏葉)、B(倭系…大型矩形環状鏡板付轡・心葉系三葉文杏葉))が出土していることが示唆するように「神二〇二三」、七号遺跡でも振り環頭大刀の佩用者が祭祀や対外交渉などの場面に応じて舶倭の馬装を使いかけた可能性はある「cf内山二〇一二、桃崎二〇二二」。だがそれでも、類例からみて振り環頭大刀と組みあう可能性がよりたかいたのはA・Bセットである。甲冑をとまうのは寛弘寺七五号墳を参考にBセットとみておく。二本の三角穗式鉄鉾も振り環頭大刀の佩用者一人に一本ずつ割り振れば、均質的な武装となる。



沖ノ島7号遺跡Bセット馬装の復元図[桃崎2022]

●振り環頭大刀(S:1/5) ●鉄鉾(S:1/5)



●楕円形十字文鏡板付轡・楕円形三葉文杏葉(S:1/8)

図出典

●は井田川茶臼山古墳出土品
 [三重県教育委員会 1988『井田川茶臼山古墳』]

図15 沖ノ島7号遺跡のBセット馬装と井田川茶臼山古墳の武装

七 六・七世紀の宗像における武装具の特質

沖ノ島祭祀遺跡で出土した武器や武具、馬具について述べてきた。ここでは沖ノ島の武装をより相対的に評価するために、沖ノ島祭祀に携わったであろう人びとの武装を検討する。

沖ノ島七号遺跡出土武装具の特徴をいま一度確認するならば、水晶製三輪玉をとまなう振り環頭大刀、三角穂式をふくむ鉄銚、片刃と両刃からなる長頸鎌の束、三葉形立飾付帯状金具をもつ胡籙、金属装化した上辺山形の盾、衝角付冑と緘孔二列小札など、そのいずれもが上位階層の倭製品であることに尽きる。このほかの金工品には舶載品をふくみつつも、伝統的な倭の武装に身を包む点にこそ、七号遺跡の奉斎者、そして祭祀の本質があったのである。各品目の類例が日本列島各地で出土しているながらも、分布の核は近畿にある点や、これらの品目をすべてそろえる古墳はかぎられない点も、沖ノ島における武器祭祀の隔絶性や集約性を物語る。

このような沖ノ島七号遺跡の武装は、九州北部では長崎県双六古墳（九一m）や福岡県桂川王塚古墳（八六m）など、全長九〇m前後の後期前方後円墳に匹敵する。宗像の後期前方後円墳のうち、宗像市では相原古墳（Ⅱ相原E一 一号墳、六二m）、福津市では在自剣塚古墳（一〇一・七m）、古賀市では船原古墳（四五m以上）を最大とすることから、これらの古墳被葬者が沖ノ島、とくにD号巨岩の祭祀にちかしい人物だったと仮定する。

相原古墳出土金属製品のほとんどは細片化しているが、つぶさに検討す

れば、①沖ノ島七号遺跡出土品と類似した金銅装辻金具の脚四点や金銅製鉸具の刺金、②縦長板鋌留冑とおぼしき破片や緘孔一列小札、胸当状鉄製品とみられる破片、③蛇行状鉄器とみられる破片をみいだせる（図一六）。①のうち脚の先端を尖らせた辻金具は、舶載品およびそれを模倣した製品にみられる「宮代一九九三」。相原古墳の辻金具脚は付け根にある両端の溝が退化していることから、沖ノ島出土品に後出する。②は、製作地は不明瞭ながらも朝鮮半島系冑の組みあわせだろう。最下段に孔を三角形に三点穿つ小札は、高句麗五女山城三号大型建築址J3、日本では奈良県飛鳥寺塔心礎出土品に類例がある「内山二〇〇六」。③は「鉄製輪鐙」と考えられているが、この想定では大きすぎ、飛鳥寺塔心礎で出土した蛇行状鉄器のU字形部材と輪郭や厚さが一致する。

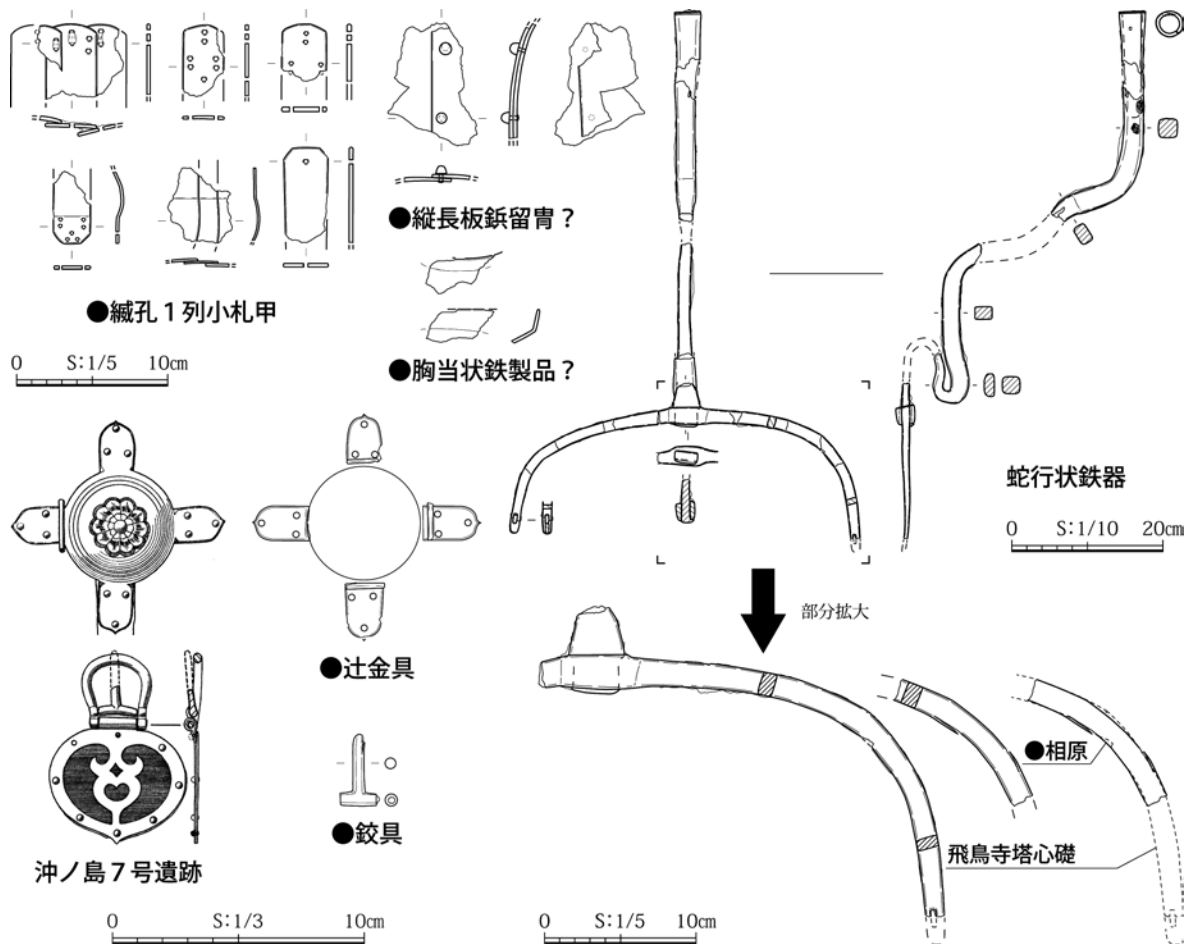
蛇行状鉄器は高句麗由来の馬具である「諫早二〇一五」。推古元年（五九三）に飛鳥寺でおこなわれた仏舎利埋納儀式にあたり、小札甲や馬鈴、刀子、耳環、二、三〇〇点以上の玉類などとともに塔心礎に納められた蛇行状鉄器は、日本への仏教導入のありかたを示す。宗像では宗像市大井三倉五号墳の一例、福津市手光南二号墳の一例、船原古墳の三例が濃密に分布し、宗像市域最大規模の相原古墳から出土しても違和感はない。

船原古墳の一号土坑でもおびただしい数の裝飾馬具が出土しているが、とくに注目すべきは、二連三葉文心葉形杏葉の透彫文様板と地板の間に玉虫の翅を敷き詰めている点だろう「西二〇二二」。玉虫裝飾の馬具は本来、新羅の王陵に副葬される最高級品である。日本では奈良県法隆寺の玉虫厨子のほか、沖ノ島や正倉院中倉で玉虫翅の裝飾品がみられる。

このように、相原古墳や船原古墳の被葬者はたんなる在地の有力首長という位置づけにとどまらず、倭の有力首長と朝鮮半島勢力の通信役、そして沖ノ島祭祀の中核にも少なからず携わった人物とみるのが妥当だろう〔cf.内山二〇二三、齊藤二〇二三a、鈴木二〇二一、桃崎二〇二三〕。

このほか、宗像では秀逸な武装具や装身具が出土する小規模な墳墓も多い〔齊藤二〇一九〕。直径一三mの円墳である宗像市牟田尻中浦A一〇三号墳もその一つであり、振り環、全長四〇cmちかくに復元される飾履、鉄製地板をとみなわな金銅製馬具（鞍の磯金具、小型の辻金具、鉸具）、多数のガラス玉、ミニチュア鉄斧などが出土している。

平安時代の法典『延喜式』卷八「龍田風神祭」の祝詞には「御馬に御鞍具へて、品々の幣帛献り」とあり、延暦二三年（八〇四）、伊勢皇大神宮の祭式をまとめた『皇太神宮儀式帳』に記す「荒神宮神財八種」の一つにも金銅装の鞍が挙げられる。笹生衛が、馬や馬具を神へ供える儀礼の起源を沖ノ島七号遺跡に求めるように〔笹生二〇一二〕、牟田尻中浦A一〇三号墳の金銅製馬具についても儀礼用の木馬に装着するなどして、実際の騎乗には供しなかった可能性がある。沖ノ島の隔絶性のみならず、飛鳥時代から奈良時代にかけて畿外に設置された「八神郡」^註のうち、沖ノ島をふくめた宗像神郡の前史を物語るものとして等閑視できない資料である。



図出典 ●相原古墳 [海の道むなかた館蔵]
 飛鳥寺塔心礎 [諫早直人 2015 「飛鳥寺塔心礎出土馬具」『奈良文化財研究所紀要 2015』奈良文化財研究所 改]
 沖ノ島7号遺跡 [宗像神社復興期成会 1958 『沖ノ島』]

図 16 相原古墳出土の甲冑・馬具と関連資料

展 望

ここまでの検討をもとに、武装からみた沖ノ島の奉斎者像を抽象化するならば、つぎのようになろう。

七号遺跡の奉斎者は、振り環頭大刀を中心に「ヤマトブランド」とでも呼ぶべき武装具に身を包んでいた。明確な在地生産品や補修品、模造品をみだしにくい点にもそうした奉斎者の隔絶性が表れている。舶載馬具の保有には渉外能力のたかさが反映されるのだろうが、倭系装飾大刀と甲冑、装飾馬具の組みあわせこそが倭王権の中枢に連なる最も格式のたかい武装をなしていたとみるべきであり、あらためて、七号遺跡の奉斎者は倭王権の意向を受けつつ国家祭祀の急先鋒を担った人物として評価できる。なお、類似した武装具が出土した古墳として、埼玉將軍山古墳や井田川茶臼山古墳、河内愛宕塚古墳が挙がる。

たほう、八号遺跡の奉斎者は外来系の大刀にかかわる情報を摂取できるような、国際性に富んだ人物だった。なおかつ、金銅装頭椎大刀の祖形ととらえうる大刀をもつことから、宗像で頭椎大刀が展開するきっかけとなる人物でもあったようだ。間接的な解釈ではあるが、関東でいえば綿貫観音山古墳、宗像の内地でいえば相原古墳の被葬者とちかしい役割を担っていた可能性があることを予察しておこう。

以上、東アジア諸国との境界領域にたたずむ孤島の祭祀空間にあつては、D号巨岩という一つ屋根の下で倭の伝統を重んじた七号遺跡の奉斎者と、革新を体現した八号遺跡の奉斎者の共存こそが、沖ノ島全体の本質を示す

と展望する。

それにしても、沖ノ島祭祀遺跡の出土品はそれを研究する者に最高度の気力、体力、知力、集中力、そして総合力を求める。小稿も所詮、半世紀前に刊行された報告書の記載と各器物の先行研究、そしてガラスケース越しの観察所見をまとめたものにすぎない。いつの日にか、古墳時代の武器・武具・馬具研究、そして王権論の成果を総動員して再論することをめざしながら、ひきつづき関連する資料の基礎的な研究をすすめていきたい。

(島根県立八雲立つ風土記の丘)

註【神郡】(しんぐん、かみごおり)

七世紀後半以降に特定の神社を維持するために定められた特別な郡。神社の修繕や祭祀にあたり、その郡の税収をあてることができた。九世紀の『令集解』によれば、養老七年(七二三)一月時点で全国に八つの神郡(度会郡・多気郡(三重)、安房郡(千葉)、香取郡(千葉)、鹿島郡(茨城)、名草郡(和歌山)、意宇郡(島根)、宗像郡(福岡))があつたという。神郡は特定の建造物ではないためにその存在を考古学的に裏づける遺構・遺物はみだしにくく、古代史学や神道史学からのアプローチがほとんどである。そうしたなか考古学からは、笹生衛や穂積裕昌が古代の祭祀につながる遺物相の推移をみいだしながら神郡の基層を古墳時代に求め、古くからの土地の伝統や特質が醸成された先に神郡が設置されたとみる[笹生二〇一二、穂積二〇一二]。

参考文献

- 諫早直人 二〇一二「九州出土の馬具と朝鮮半島」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対
外交渉』九州前方後円墳研究会 八九―一二二頁
- 諫早直人 二〇一五「飛鳥寺塔心礎出土馬具」『奈良文化財研究所紀要二〇一五』
奈良文化財研究所 四六―四九頁
- 内山敏行 一九九二「古墳時代後期の朝鮮半島系冑」『研究紀要』一 栃木県文化
振興事業団埋蔵文化財センター 一四三―一六五頁
- 内山敏行 二〇〇六「古墳時代後期の甲冑」『古代武器研究』七 古代武器研究会
一九―二八頁
- 内山敏行 二〇一二「裝飾付武器・馬具の受容と展開」『馬越長火塚古墳群』豊橋
市埋蔵文化財調査報告書二二〇 豊橋市教育委員会 三一三―三二四頁
- 内山敏行 二〇一九「衝角付冑と二列小札甲―古墳時代甲冑のセット関係―」『倭
の考古学―藤田和尊さん追悼論文集―』ナベの会 一七五―一八四頁
- 内山敏行 二〇二三「古墳時代の外来系武器と倭系武器」『古代武器研究』一八
古代武器研究会 三七―五〇頁
- 大谷宏治 二〇一六「中原四号墳出土刀剣類・馬具の特徴と被葬者の性格」『伝法中
原古墳群』富土市埋蔵文化財調査報告五九 富土市教育委員会 一九三―二〇八頁
- 金 宇大 二〇一七『金工品から読む古代朝鮮と倭 新しい地域関係史へ』京都大
学学術出版会
- 小嶋 篤 二〇二一 a 「宗像の鉄刀・刀子・雛形鉄刀」『沖ノ島研究』七 「神宿る島」
宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会 一七―三八頁
- 小嶋 篤 二〇二一 b 「考古資料からみた宗像君・沖ノ島祭祀の実像」『大宰府史
跡指定一〇〇年と研究の歩み』九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集
二 九州国立博物館 二五三―二六三頁
- 齊藤大輔 二〇一八「岩戸山古墳出土の振り環頭大刀形石製表飾」『古文化談叢』
八一 九州古文化研究会 一七一―一八六頁
- 齊藤大輔 二〇一九「古墳時代後・終末期における武装具保有の実態―境界領域
としての北部九州―」『九州考古学』九四 九州考古学会 二七―四七頁
- 齊藤大輔 二〇二〇「古墳時代後・終末期における武装具流通の実態―三角穗式
鉄銚を事例として―」『土曜考古』四二 土曜考古学研究会 八九―一一七頁
- 齊藤大輔 二〇二二「古墳時代日本列島における東アジア刀剣文化の受容と内製化の
諸段階」『韓日の武器・武具・馬具』九州考古学会・嶺南考古学会 七五―九三頁
- 齊藤大輔 二〇二三 a 「玄界灘沿岸における六・七世紀の武器と武装」『九州考古学
の最前線―縄文と古墳編』季刊考古学・別冊四三 雄山閣 一〇九―一二二頁
- 齊藤大輔 二〇二三 b 「古墳時代後期における鉄銚の変遷」『後期古墳研究の現状と
課題Ⅰ―交差編年の手がかり―』中国四国前方後円墳研究会 一五九―一七二頁
- 笹生 衛 二〇一二『日本古代の祭祀考古学』吉川弘文館
- 神 啓崇 二〇二三「古墳時代後期後半の外来系飾馬具―金銅製辻金具の紹介と
埼玉將軍山古墳馬具の検討―」『Archaeo-Clío』二〇 東京学芸大学アーキオ・
クレイオ刊行会 七五―八六頁
- 神 啓崇・西 幸子・桃崎祐輔 二〇一八「岩戸山古墳石馬の馬装研究」『古文化談叢』
八一 九州古文化研究会 五一―七八頁
- 杉山秀宏 二〇二三「群馬県における古墳時代鉄鏃の棘状関の出現について」『研
究紀要』四一 群馬県埋蔵文化財調査事業団 七九―一〇三頁

- 鈴木一有 二〇二一「船原古墳一号土坑出土遺物からみる東国社会」『令和三年度
国史跡船原古墳講演会資料集』古賀市教育委員会 三―一二頁
- 第三次沖ノ島学術調査隊 一九七九『宗像沖ノ島』宗像大社復興期成会
- 高田貫太 一九九八「古墳副葬鉄銚の性格」『考古学研究』四五―一 考古学研究
会 四九―六九頁
- 高松雅文 二〇〇七「古墳時代後期の政治変動に関する考古学的研究」『研究集会
近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会 三八三―三九七頁
- 滝沢 誠 二〇〇〇「平沢古墳群出土の胡籛」『沼津市史研究』九 沼津市教育委
員会文化振興課市史編さん係 一―一八頁
- 土屋隆史 二〇一八『古墳時代の日朝交流と金工品』雄山閣
- 奈良市教育委員会 二〇二三「富雄丸山古墳の発掘調査―第六次調査―」
- 仁木 聡 二〇〇七「王権祭祀と沖ノ島 古墳出土品の出土状況からみた沖ノ島祭
祀遺跡について」『神々の至宝 祈りのこころと美のかたち』島根県立古代出雲
歴史博物館 二二〇―二二九頁
- 西 幸子 二〇二二「古賀市船原古墳一号土坑出土の玉虫装飾馬具について」『韓
日の武器・武具・馬具』九州考古学会・嶺南考古学会 三〇三―三一五頁
- 橋本達也 一九九九「盾の系譜」『国家形成期の考古学―大阪大学考古学研究室―
○周年記念論集―』大阪大学考古学研究室 四七一―四八六頁
- 橋本達也 二〇二三「盾形銅鏡」の系譜―行燈山古墳・津堂城山古墳出土銅板の
再評価―『第一九回古代武器研究会発表資料集―古代武器における研究視点
の多様性―』古代武器研究会 八四頁
- 橋本英将 二〇〇六「折衷系」装飾大刀考」『古代武器研究』七 古代武器研究会
- 五〇―五七頁
- 穂積裕昌 二〇一二「伊勢神宮成立に関する考古学的評価」『古代学研究』一九四
古代学研究会 一―二三頁
- 水野敏典 一九九三「古墳時代後期の軍事組織と武器副葬―長頸鏃の形態変遷と
計量の相関にみる武器供給から―」『古代』九六 早稲田大学考古学会 七四―
一〇四頁
- 宮代栄一 一九九三「中央部に鉢を持つ雲珠・辻金具について」『埼玉考古』三〇
埼玉考古学会 二五三―二九〇頁
- 宗像神社復興期成会 一九五八『沖ノ島』
- 宗像神社復興期成会 一九六一『続沖ノ島』
- 桃崎祐輔 二〇二二「沖ノ島出土馬具の復元的研究」『沖ノ島研究』八 「神宿る島」
宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会 六七―九五頁
- 桃崎祐輔 二〇二三「船原古墳の遺物埋納土坑と出土馬具からみた東アジアの国際
情勢」『船原古墳とかがやく馬具の精華』九州歴史資料館 一二〇―一二七頁
- 弓場紀知 一九八五「沖ノ島出土船載遺物の再検討―特に金銅製龍頭の流伝に関
して―」『国立歴史民俗博物館研究報告』七 国立歴史民俗博物館 一九―二
一七頁